

上演稿

老獣のおたけび

作
山本
タカ

登場人物

川村 明利 (32)

雅史 (35)

徹 (63)

友田 千春 (29)

大村 健 (41)

タカシ (19)

舞台は、一幕一場のみ、東京のアパートの設定である。以降は、愛知県三河地方にある、家を舞台に行われる。昨一幕二場以降の舞台装置はすでに舞台上に存在している。東京のアパートのみ、暗幕などで簡易に区切られて表現される。

一幕

〈二場〉

暗転中、明利の兄・雅史の留守電の音声。

雅史（声）

もしもし。頼む。電話に出てくれ。ちょっと、親父の様子がおかしい。昨日から何度も電話があつて。こつちが何か聞いても、変な声を漏らすだけで、要領を得ない。様子見にいけないか？俺も仕事調整してみるけど、早くても明日の夕方になる。頼む。

暗転があげると東京にある1Kのアパート。夜。季節は盆前の夏。

一脚の椅子とテーブル。

椅子に腰掛け、明利は、集中してノートパソコンをタイピングしている。

テーブルには、二つのコップがある。

トイレの流す音。

明利は、集中して、タイプしている。が、突如、立ち上がりうろろし始める。

千春が、麦茶の入った水差しを持って登場。

以下の会話の最中、千春は二つのコップにお茶を注ぐ。

千春 （水差しを持ったまま）できたの？

明利 休憩中。頭がオーバーヒートしてる。

千春 （お茶を入れながら）どれぐらい？

明利 え？

千春 進捗。今、全体の。

明利 （苦笑い）3割、いや、1割かな。ほとんど書き直しだから。

千春 いつまで？

明利 明後日。

千春 明後日！？

明利 そう。昨日打ち合わせして明後日だよ。びっくりでしょ。

千春 ……ああ、そう。

明利 簡単に言うよね。主人公の設定を変えるなんて。こっちは一から十までパズルみたいに考えてんのにさ。

千春 でも、的を得ているんでしょう？その、

明利 的を射る、ね。正確には。

千春 そのプロデューサーさんの言うこと。

明利 まあ、百戦錬磨のテレビマンだから。言われれば、納得ですよ。

千春 じゃあ、素直にそれ書けば？

明利 書いてるよ。でも、あつちが言うのは、真ん中の、中心部のことだけなの。脚本家としては、じゃあ、2話以降の展開をどうしようかとか、主人公の設定が変われば、周囲との関係も変わるの。

千春 ああ、もうわかった。わかった。

明利 フリーターから、脱サラしたバツイチの子持ちだよ？恋愛パートも簡単じゃないし、家族の関係だって何かと複雑になる。もう全部、一から。

千春 わかったから。

明利 整理しないといけない。真ん中の、一番重要ピースが変わっちゃったから。

と言って、明利はお茶を一気に飲み干す。

その時、明利のスマートフォンが震える。

明利、特に見もせず、着信を切る。

千春 出なよ。

明利 兄貴だよ。

千春 え？

明利 たぶん、盆の予定。

千春 ああ……どうするの？

明利 いや、帰れる状況じゃないでしょ。

千春 お母さんのお墓参り。

明利 わかってる。

間

千春 一緒に帰ろうか。愛知。今年は私も。

明利 え、いや、ちょっと待って。
千春 だって、ずっと紹介してくれないじゃん。
明利 ちょっと、待って。一回整理させて。
千春 待ってる。ずうっと待ってる。去年も何かと理由つけて。
明利 去年はまた別の案件が。
千春 わかっている。でも、いつも、そう。
明利 これは外せないんだって。
千春 連ドラだもんね。15分でも。

間

千春 だから、そっとしておいた。一昨日まで。やっと普通に話せるかなって思ってた昨日、打ち合わせから帰って来たらまた、うんうん唸りながら机にかじりついて。
明利 しょうがないじゃん。時間がないんだから。

間

千春 (息を整え) あのさ。
明利 わかった。いったん留守電を聞きます。
千春 ……そうして。
明利 俺もね、覚悟はあるから。でも今は、いろいろなことに気をとられすぎて。
千春 留守電聞きなよ。
明利 聞く。一つ、わかかっておいて欲しいのは。
千春 何？
明利 面倒臭い。親父は。昔のサラリーマン特有の、父権的な価値観に支配されてる。会えばやれ就職しろだの、給料はいくらだの。紹介の場一つセッティングするにも、やんや言われる。今の俺の状況で説得するには、相当、骨が折れる。
千春 聞いた。そのことは何度も。留守電。

明利、留守番電話を聞く。

間

明利、留守電を聞き終わる。

千春 何？
明利 いや。…盆の予定だった。
千春 あ、嘘だ。

明利 うん、嘘だ。
千春 やめてよ。すぐわかるんだから。
明利 なんだ、体調が悪いつぽい。親父の。
千春 え？
明利 いや、大した感じではないんだろうけど。
千春 怪我とか？
明利 いや。
千春 病気？
明利 留守電にはそこまで。
千春 かけ返しなよ。え、救急車とか？
明利 そこまで大ごとにはなってる。ただ。ああ、面倒臭い。急なんだよ。
千春 何？
明利 様子見に行けなかった。

間

千春 行きなよ。
明利 いや、無理でしょ。
千春 一人暮らしでしょ？ お父さん。もしものことがあったら。
明利 締め切りが。
千春 延ばしてもらえないの、それ。
明利 言えば、はいそーですかとはなるだろうけどさ。
千春 え、それ、多分、緊急のやつでしょ？ 間違ってるよ。優先順位。

間

明利 わかった。明日帰る。朝一の新幹線で。
千春 お兄さんにも電話。
明利 かけ返す。いったん、整理だけして、それから。

間

千春 あのさ。
明利 大丈夫。大事じゃなかったら、しておくよ。結婚の話は。
千春 うん。
明利 ……おしっこ。

明利がトイレに行く。用を足す音。
千春、お腹をさする。
暗転。

〈二場〉

明利の実家。典型的な日本家屋。
居間が舞台の中心となり、玄関まで見えている。
夕方。居間には象（アジアゾウ）がいる。
この象は、明利の父の徹である。座卓を挟んで、雅史がいる。
雅史、象を見たり、明利を見たりしながら、話し出す切り口を探っている。

明利 ……もういい？ 俺帰って。
雅史 は！？ お前、もうちよっと、いろよ。
徹 あ、そうだ。
雅史 え？
徹 あれお願いしようと思っただ。お母さんのお墓参りに来る人と、その後、お寺さんに行つてご飯食べる人。
雅史 ああ、うん。
徹 電話で 聞いといて欲しいだ。ファイルあるで、出すわ。(動こうとする)
雅史 ああ、俺出すよ。何色？
徹 赤だったな。背表紙に書いてあるら、「お寺」だかなんだ。
雅史 (見つけ) ああ、はいはい。これは、全部？
徹 そう。一旦大村さんに連絡せんといかんもんで。
雅史 (名簿を見て) 叔父さんも俺から電話しちゃつていいの？
明利 帰るけど。
雅史 だ、お前。
徹 ええわ、兄貴は。
雅史 え？ ああ(明利に) とにかくちよっと、いろお前は。
明利 忙しいんだけど。
徹 (明利に) 何だ？ バイトか。
明利 原稿。
雅史 せっかく帰ってきたんだからさ、とりあえず。
徹 こいつ、雅史の電話には出るだら？
雅史 え？ ああ、たまに？
徹 俺からの電話には一度も出りやせんのに。何しとるだ。今、全く知らんぞ。

明利 書いてます。脚本を。
 徹 それで、いくらもらえるだ。10万か、20万か。30万もらってりゃ、ちよつとは、胸張れるわな。それでも、年金とか保険料引いたら馬鹿にならん。雅史はいいよ。銀行は、歳食えばだんだんもらえるようになるで。大学院まで行かせた甲斐があつたわ。
 雅史 いいよ、俺の話は。

徹、雅史を鼻で抑えつつ、話を続ける。

徹 会社に勤めとらんってことは、歳食っても、給料もらえる保証はないっていうことだ。で。わかつとるのか？ やい。わかつとるのか？
 明利 (雅史に) あ、マジで、もういい？
 徹 (明利に) やい！
 雅史 (徹に) あんこ好きだら！
 徹 あ？
 雅史 親父、あんこ好きだら。
 徹 あんこ、好きだよ。
 雅史 だら？ 車に和菓子。こつちで人気の。赤福みたいな、赤福じゃないやつ。偽もんみたいな、でも美味しいやつ。積んであるで、持って来るわ。(明利に) 手伝え。
 明利 赤福買ってこいよ。
 雅史 いいから。手伝え。

明利、雅史、靴を履いて玄関へ。

二人、外に出ると、雅史が扉を閉める。

雅史、和菓子を取りに行こうとする明利を止め。

雅史 嘘嘘。嘘だから、赤福。
 明利 え？
 雅史 確認したいんだけど。……あれ、親父だよな？

間

雅史 親父だよな？ あ、象。
 明利 じゃない？
 雅史 え、びっくり。
 明利 したよ。最初は。

雅史 だよな。どういう、え？ 親父が、象になった、ってこと？
明利 多分。
雅史 言ったのか？
明利 何を？
雅史 先に来てただろ。親父に。「象だよ。象になってるよ」って。
明利 言ったよ。
雅史 それで？
明利 鼻で笑われた。
雅史 で？
明利 以上、終了。
雅史 お前。
明利 聞かないから、俺の言うことは。
雅史 いい。わかった。とにかく、親父は、自分が象になっている自覚はないんだな？
明利 多分ね。
雅史 オーケー。作戦を練ろう。とにかく、親父を、一人に。
明利 一頭でしょ？
雅史 一人にすべきじゃない。わかるな？ 作戦が必要だ。

間

明利 作戦？
雅史 親父もきつと混乱する。順を追って理解させる必要がある。
明利 順？
雅史 それとなく、話に出し、徐々に理解させる。もしも、混乱して、あんなのが暴れて
みろこんな家、ひとたまりもない。
明利 (ため息)
雅史 で、必要だったら、どっちかが買い出しに行くなり。
明利 買い出し？
雅史 飯だよ。あんなにでかいんだから。
明利 マジでそんな時間ないんだけど。
雅史 今は、人目につくべきじゃない。数日間家はこもってた方がいい。親父を見張っ
ている必要がある。
明利 見張る？ 誰が？

徹は、二人の会話の最中、鼻で何かを探している。

徹 あれ、あれどこだったかや？
雅史 後で話そう。(扉を開け) 親父？ どうした？

兄弟は、家の中に戻っていく。

徹 あれ、あれがないだ。えーつと。

雅史 ごめん、赤福、置いて来ちゃったわ。

徹 赤福？

雅史 そう。買って家に置いて来ちゃった、申し訳ない。

徹、依然鼻で何かを探している。

雅史 親父さ、最近体調はどうよ？

徹 別に、どうもない。

雅史 体が、重くなつたとか？

徹 重いよ。年々な。

雅史 ここ、数日は？

徹 あ？

雅史 電話してきたじゃん。妙に腹が減るとか。

徹 あー強いて言えば。

雅史 強いて言えば？

徹 あれ？

雅史 何？

徹 やんや言うから忘れちまつたじゃないか。

雅史 ごめんごめん。何探しとった？

明利 親父、象になってるから。

間

雅史 お前。

明利 もういい。面倒くさい。親父、象になってる。

徹 (雅史に) 何言つとる？

雅史 驚かずに聞いて欲しい。

明利 動物の象ね。スタチューの方じゃないよ。エレファントの方ね。さっきから何か探してるみたいだけど、それも、手じゃなくて、鼻、鼻で探してる。

徹、雅史を見る。

雅史 まあ、そう言えば、そう見えるなって。

明利 いいよもう。

雅史 良くないよ。

徹 何、俺が何って？

明利、鏡を持って来る。

雅史 ちょっと待て！

雅史、鏡を取り上げようとするが、明利が制し。

明利 ほら。

父親、鏡を持ち、鏡を近くにもったり、遠くに持ったり。

徹 俺、目が悪いだ。

明利 老眼鏡どこ？

徹 いいいい。 ちょっとえー。 ……あ？

父親、鏡を持ったまま、固まる。

明利 理解した？

雅史 大丈夫。 こういうことはままある。

明利 あんの？

雅史 知らん。

徹 ん？ 今、俺。

明利 象になってる。

雅史 大丈夫。 何とかなる。

徹 象？

雅史 ちょっと、教えて欲しい。

徹 全身？

明利 全身。 頭の前から。 爪先まで。

雅史 急になったのか。 そうじゃないのか。 何か、思い当たることとか、その、こうなった原因として。

徹 ……知らん。なつとらん。なつとらんよな。雅史。

間

雅史 手がかりを知りたいんだ。病気だったら何らかの治療法が。
徹 お前ら あれか、からかってんだろ？ え？

間

徹 なつとらん。なつとらん！ なんだお前ら、よってたかって、馬鹿にしゃがって！

徹、次第に興奮してくる。

鼻息を荒くし、その場で足踏みをし始める。

雅史 違うんだ。親父、聞いて！

徹 明利！ お前、去年はなんで帰ってこんかっただ！ 母さんの墓参りをないがしろにして、母さんが、けいちゃんがお前をどれだけ心配しとったか、わかっとなるか！

明利 親父だろ、母さんの三回忌のとき！

徹 なんだ！ 俺がなんだ！

明利 言っただろ！ 一人前に稼げるまで、帰ってくるなって！

雅史 (明利に) バカ！ いい加減にしろ！

徹 何を言っただ！ 言ってみろ！

雅史 落ち着こう。いったん、落ち着こう。

徹 (雅史に) お前、お前はなんだて。

雅史 何、何が。

徹 最近は全然うちに来んじやないか。

雅史 しようがないだろ。転勤になったんだから。

徹 しようがないって何だ！

雅史 いったん、落ち着こう。な！ 親父。かあさんが心配するから。

その時、玄関の扉が開く。大村と、その息子のタカシが入って来る。

タカシは、大きな水筒を提げ、キャベツを二玉持っている。

(玄関から居間は見えない様になっている。)

大村 お兄さん、来とるのかん？

間

雅史 はい！ 俺出るわ。(親父に小声で) 静かにしとつて？ な？

雅史、玄関に行く。

明利は、居間で待つ。

雅史 どうも。わ、立派な。

大村 言つてよ、来とるなら。タカシ、もう二個ぐらい。

雅史 いえいえ、そんな。

大村 奥さんと娘さんと、食べるでしょう？ トラックに積んであるもんで。

と、大村が指示を出すと、タカシ、キャベツを取りに退場。

大村、次第に玄関に腰をおろし、勝手に寛ぐ。

大村 徹さんは？

雅史 ちよつと体調崩しちゃつて。

大村 え、風邪？

雅史 だと、思います。はい。

大村 あれだったら病院。

雅史 はい、様子見ながら。

大村 え、それで帰つて来たの？

雅史 車飛ばして。

大村 偉いね。あ、お茶もらえる？

雅史 あ、すいません。

雅史、台所に行く。

大村 安心だ。徹さんは、こんな立派な息子さんがいりゃあ。

雅史 いやいや。

大村 弟くんの方は、元気かん？

雅史 あー。まあはい。

大村 寂しいね。お母さんのことがあつてから顔見せたと思えば、去年また来なくなつて。

雅史 いえ、まあ。

大村 言うとつたじゃん。あんたも。

雅史 あ、えっと？
大村 薄情者だって。その通りだと思うに。
雅史 え？ 言いましたっけ？

これまでの会話の中で、大村は雅史から出された麦茶を飲み干している。
タカシが、新しいキャベツを持ってくる。

大村 言っとったよ。おま、もっとキレイなのあったろう。
雅史 あ、いいですよ。これで、全然。
大村 (タカシに) 風邪引いとるって。よう見とれよ。
タカシ ごめん。

以下の会話の最中、タカシは水筒から麦茶を注ぎ、大村に渡す。
大村は、会話の最中、何度も麦茶を飲み干し、タカシに注がせる。

大村 ちよくちよくこいつを遊びに行かせてるんですよ。
雅史 ああ、そうなんですか。
大村 同じ三河でも、徹さんの地元ってわけじゃないでしょ。ここ。
雅史 ですね。
大村 偉いに。おばあさんの介護のためとはいえ、定年前に奥さんの実家に住むことにしたのは。徹さんが、次男だからそうできたんだろうね。でも今、こうして、家も、畑もちゃんと。
雅史 畑は、大村さんに任せっきりで。
大村 うちはいいだよ。いい条件で貸してもらっとるもん。ずっとでもいいだよ。
雅史 はい。(タカシに) 最近、変わった様子とか、あった？
タカシ え？
雅史 前から調子悪かったのかなって。
タカシ この前遊びに来た時は、特に。

間

雅史 そう。
大村 今日帰るの？
雅史 いや、どうしようかなと。
大村 明日も仕事でしょ。
雅史 はい。なんで。

大村 こういう時にこそ、弟君が来るべきだで。

雅史 もうはい。なので。

大村 フラフラしとるだら？

雅史 どうでしょ。最近は。

大村 徹さんがタカシを可愛がってくれとるのは嬉しいよ。でも、本来であれば、本当の息子がね？

雅史 おっしゃる通りで。

大村 いい年だら？ 弟君。いつまでも、そんな、親不孝だに。(タカシに) ちよ、徹さんに、顔見せてこい。

タカシ、言われて靴を脱いで上がろうとする。

雅史 あの、本当に調子が悪いので。

と、その会話を聞いていた明利、居間から出てくる。

間

明利 ご用件は？

間

大村 何、来とったの？

雅史 キャベツもらっただ。

明利 だけすか？

間

大村 今度の集まりの出席聞こうと思ったんだけど。……ま、体調次第って感じかね。良かったら、食べて。

大村、タカシを連れて、退場。

雅史と明利、玄関にて。

雅史 バカ、お前、もう。

明利 何をそんなへいこら。

雅史 畑の世話、してもらってるだ。

明利 畑？

雅史 親父じゃ世話しきれんから、ちょっと前から代わりに。

明利 何、そうなの？

雅史 後で謝りに行こうかな。

明利 インターホンぐらい押せよ。

雅史 ここらへんの人はそうなの。……お前、しばらく泊まってけ。

明利 は？

雅史 パソコン、持って来とるだら。

明利 いや、だから。

雅史 まだ周囲には、象になったことはバレてないっぽい。でも、大村さんだっていつ来るか。

明利 締め切りがあんだって。

雅史 週末にはまた来るから、それまで。

間。

明利 手に負えない。しかるべき所に頼った方がいい。

雅史 今は、人に知られるべきじゃない。わかるな？

間

うなだれる明利。

〈三場〉

前場の日の夜。玄関にて、千春と電話している明利。
電話の相手である千春は、東京のアパートにいる。

明利 だから、まだできてない。結婚の話は。

千春 はい。

明利 するよ。折見て、親父の体調がよくなったら。

千春 え？ 話せないわけじゃないんだよね？ 元気は元気って言ったよね？

明利 藪から棒に言うわけにもいかないからさ。

間

千春 プロットは？

明利 いや、まだ。全然。5割にも。
千春 締め切り。
明利 聞いた。大丈夫。一日もらった。
千春 できそうなの？
明利 やるしかないでしょ。

間

千春 明日、行こうか、私。
明利 え？
千春 だって、進まないでしょ。
明利 いや、いい大丈夫。
千春 看病手伝いに。
明利 大丈夫、大丈夫だから。
千春 あー。

間

千春 ダメだ。もう言っていない？
明利 は？ 何が。
千春 ごめん、言うね。もう言う。もう言うよ。
明利 なになに？ こわいこわいこわい。
千春 妊娠した。

間

千春 昨日検査薬使って今日、婦人科行って。妊娠しました。

間

千春 もしもし。
明利 もしもし。
千春 え？ 聞こえてる？
明利 聞こえてる。
千春 何か言ってるよ。

間

明利 素晴らしい。

千春 は？

明利 え？ ちょっと待て、こんな、え？ 電話で。そんな、え？ ちょっと、え？ ごめん、えー、今、俺は、立ったり、座ったりしています。

千春、舞台上の空間を超越し、直接明利を殴る。

明利 (理解できず) え？ え？

千春 イラッとして、空間を超越しちゃった。そういうことだから、挨拶だけでも。

明利 あ、あの日。

千春 え？

明利 連ドラが決まった。あの、夜。大変、盛り上がったものな。

千春 あー超越しそー。

明利 ごめんごめん、ごめんごめんごめんごめん、ごめん。

間

千春 産むよ？

明利 もちろん。なんでもっと早く。

千春 締め切りあったじゃん。

明利 え？ あ。気、遣って。

千春 区切り着くまではと思ってたんだよ、私も。

明利 申し訳ない。

千春 予定日ももう出てて。両家顔合わせとか、あるから、色々。

明利 そうか。そうだよな。

間

千春 別に形式ばって挨拶するわけじゃなくて、お見舞い。っていうか。看病。

明利 いや、ちよ、ちよっと待て。でも、だって、体の調子は？ 吐き気とか。

千春 多分、もうちよっと先。

明利 動けるの？

千春 婦人科行ったんだよ？ 一人で。

明利 だよな。

千春 何？ 何をそんな。
明利 いや、あの。わかった。……でも、俺のタイミグで話させて欲しい、妊娠の話は。
千春 それは別にすぐじゃなくても。
明利 順を追って、理解してもらおう。
千春 わかった。
明利 うん。……うーん。いや、そっか、でも。
千春 何？ 何を言い淀んでんの？
明利 えーっとね！ 千春ってさ、動物好き？
千春 は？

暗転。

〈四場〉

座卓を挟み、千春と徹が向かい合っている。
明利は、二場で大村が持つて来たキャベツを剥いている。
徹は明利の剥いたキャベツを自然な動作で食べながら、千春と会話する。

徹 ご出身は？
千春 (明利を見て) 岐阜です。
徹 岐阜の。
千春 穂積っていう。
徹 あー！穂積。
千春 ご存知ですか？
徹 ええ、工場が。僕の勤めてた会社の。ありまして。
千春 ああ。
徹 よく、行きましたよ。墨俣城(すのまたじょう)ね？
千春 そうです！ 墨俣城！
徹 帰るときは、東海道線ですか。
千春 はい。
徹 名古屋で乗り換えて。
千春 大垣行きで。
徹 東京からだど、2時間、半もかかりませんね。
千春 だいたい2時間です。
徹 じゃあ、うちに来るのとそんなに。
千春 はい。同じぐらいの時間で。

徹 何にもないところでしょう。

千春 いえいえ、もう、うちの地元と似ているので、落ち着きます。

徹 そうですか。よかったら一泊。

千春 (明利を見て) ああ。

明利 仕事あるから。

徹 近くにね、悪くない寿司を出すところがあるんですよ。「喜兵衛」っていう。出前やっつて。

千春 えー、いいですね。

徹 今、電話したら、ささつと作ってくれるかもしれませんから。(明利に) おい。

千春 あ、でも、お気遣いなく。

徹 (千春に) いえいえ。(明利に) お前、こんな急に。昨日言ってくれば、注文しといたに。お腹、減つとるでしょ？

千春 あ、でもお昼食べ来ちゃって。

間

千春 新幹線で。なので、次お邪魔した時に楽しみにしときます。

徹 ああ、ほう。

間

徹 (鼻で小突き) お前もなんか、喋れ。(千春に) 大丈夫ですか？ こいつは。

千春 ああ、はい。

徹 10年ですか？一緒に暮らして。

千春 (明利が) 大学卒業してからのので。はい。

徹 お前、一度もそんな。

千春 すいません、ご挨拶が遅れて。

明利 言った。一昨年、三回忌のときに。

徹 知らんぞ、俺は。

明利 言った、俺は言った。聞いてないんだよ、俺の話を。

徹 じゃあ、もつとはつきりしゃべれ！

明利、ため息。

徹 やれとるんですか、仕事は。

千春 え？ ああ。はい。

徹 何にも話さないもんで。

千春 最近は、ね、上向きになって来て。

徹 アルバイトもやっとなるんではよ。

千春 (明利見て) いえもう。

明利 それも言った。一昨年。

徹 たとえ、脚本がものになったとしても、不安定でしょ。実際。

千春 (明利を見ながら) まあ、そうですね。でも。

徹 先々のこと見据えるとね。

千春 私も働いてますし。

徹 でも、ずっとつてわけにもいかんでしょう。

千春 そう、ですかね。

徹 そうでしょう。あ、いや、もちろん僕もね、知ってますよ。共働きの流れが、世間
千春 にできつつあるのは。とはいえ、旦那の方が、失礼、旦那になる予定の男がね、こ
んな。

千春 今はいろんな価値観がありますから。

徹 そうです。いろんな価値観がある。僕も実家が堅かったので、よくわかります。い
ろんな価値観がある。それには大変共感します。しかしね。

千春 はい、なので、私たちも

徹 男として、家族を露頭に迷わせる不安だけは、抱かせちゃいかんと思いますよ。僕
としてもね。他所様の娘さんもうんだから、せめて安定した収入の一つでもない
と、示しがつきません。脚本なら、勤めながらでも

明利 だから、そういう選択肢はない。

徹 千春さんからも、言ってくれませんか？ どうも、こいつは、私から言うと、妙
に意固地になるところがあります。

千春 はい。あの、お手洗い、お借りしても。

徹 ああ、どうぞ、どうぞ。

明利 そこ行ったところの扉に。

千春 わかった。

千春、明利に強い視線を投げかけ、退場。
間。

徹 もういいだろう。

間

徹 俺はな、お前の事じゃないで、千春さんのこと心配して言ってるだぞ。とりあえず、がむしゃらに働かせてくれるところ探して。最悪見つからなかったら、俺の後輩がまだ会社におるで、そいつに、頭下げて。妊娠してる。

明利

間

明利 妊娠してる。千春。そりゃ不安定な部分あるけど、二人で頑張っていこうって思っている。脚本は、やめない。千春もそれは望んでない。

徹 なんだ？ は？

明利 とにかく、そういうことだから。

徹 お前、そりゃ。本当の話か？

明利 色々言いたいだろうけどでも、俺たちの話だから。

徹、鼻で周囲を探り始める。

明利 何？

徹が荒く、周囲を探し始める。

明利 何、何？

明利、鼻に振り解かれる。

徹 どこに隠した！

明利 何が？

徹 電話！

明利 知らない、は？

徹 携帯。俺の。お前、盗ったのか。

明利 盗る？ は？

徹 お前だろう。どっかに。

明利 知らない。んなわけない。

徹 泥棒か、したら。

明利 は？

間

その間も、徹は荒く室内を探している。

徹　いい。家の電話でかける。

ここから、徹の鼻は家の電話に伸び始める。

明利、鼻を押さえながら。

明利　どこにかけんだよ！

徹　いい！　もうお前は！

明利　よくない！　ちよつと待て！

明利、徹の鼻を抑えようと必死になる。揉み合う様になる
千春がトイレから、戻ってくる。

千春　え？　え？

明利　ごめん、ちよつと、電話！

千春　え？　は？

明利　どっかやって！

徹　ごめんなさいね。千春さん、必ず責任は取らせますんで。

千春　え？　言ったの。

明利　言った。脚本はやめない。就職はしない。二人で話してる。

徹　どの口が言うだ！　約束が違うじゃないか。

明利　約束？

徹　ちゃんと地元で就職するってお前が約束したから、東京の大学に、行かせただぞ？

それをお前、こんな今になって。何にもわかつたらん。奥さんと子供を守らんといい
かんだぞ！　お前が！　やい！　やい！　やい！　電話！

間

再び、徹の鼻が、家庭用電話に伸びる。

徹　どけ！　会社に頭を下げてやる！

明利　アホか！　象になってんだぞ！

徹　アホつつたか！　お前、親に向かつて！

徹は、小さくなったキャベツをつかみ、明利を殴る。

そして徹は自然な動作でキャベツを食べる。

明利 ……痛てえ……の野郎！

明利は、シーン冒頭より置いてあつたもう一つのキャベツを振りかぶる。
暗転。

〈五場〉

前場の夜。踏切の音がし、電車が通り過ぎる。

最寄り駅前に停まる、車の中。明利によって、車のエンジンが切られる。

静寂。車内には、疲労感が満ちている。

千春 一つ、聞きたいんだけど。

明利 はい。

千春 俺のタイミングって、あのタイミング？

明利 いや。

千春 あのタイミングではなかったんじゃない？

明利 はい。そうだと思います。

間

千春 コミュニケーションが、必要だと思う。

明利 そうね。

千春 確かに、考え方は。

明利 父権的だろ。

千春 強く、持ってらっしゃる。でも、理解できないわけじゃない。お父さんの考えも。

明利 あ、そう。

千春 うちもそうだから。そういうもんなんだって、親っていうのは。私も、会社辞める時、フリーでデザイナーやるって言ったたら、かなり反対っていうか、心配されて、でも、根気強く、業界のこととか、考えてることとか、きちんと話していったら、だんだんだけで、理解してもらえた。本当は半分諦めてるかもしれないけど。

明利 コミュニケーションね。

千春 全く話を通じないとは、思わなかったよ。

明利 本当に？

千春 うん、私はね。そう思った。
明利 俺は……前より、話を通じなくなっている、気がした。

間

千春 え、それは。
明利 わからん。気がするだけ。昨日、兄貴も来てたんだけど、今まで、あんま、兄貴には当たったり怒鳴ったりしなかったんだよ。でも昨日、怒鳴ってた。象になったから？
千春 わからん。
明利 なんか、ないの？ 原因とか。思い当たる節。象になった。
千春 ないよ。あるわけないじゃん。

間

千春 連ドラのことは言ったの？
明利 いや。
千春 言ってみたら？
明利 ……もし、親父を説得しきる材料があるとしたら、確実なのは、金。金額だ。連ドラとかよりも。いくらいくらもえてますっていう。それが一番手っ取り早い。全部が全部、本当じゃなくていいんじゃない？
明利 え？
千春 多少、嘘ついてても。
明利 嘘ね。

間

千春 私はね、普通に、普通に、お父さんもお母さんも好きなの。そりゃ、多少嫌いなどころはあるけど、でも、全体として、好きなの。もういい年だし、安心させたい。ただでさえ、そちらのこと盛って話しちゃってるし。
明利 何、どう盛ってるの？
千春 脚本家として、若手最有力みたいな。
明利 どこが最有力？
千春 うだつの上がない凡才と一緒に住んでますなんですなんて言えないでしょ。

間

明利 今の、本音？

千春 半分本音。もう半分は信じてるから一緒にいるんでしょ。だから、そういう、良かれの嘘はついてでもいいでしょって。安心させるために。

明利 良かれの嘘。

千春 うん。

明利 ……わかった。話す、親父と。

踏切の音。

千春 お世話、大変だったら私も、タイミング見て来るから。

明利 ありがとう。

明利、千春を抱きしめようとする。

千春、その手を止め。

千春 もし、うちの親が大変になったら、その時は、協力してよ。
明利 する。

千春、明利を抱きしめる。

暗転。

二幕

〈一場〉

前場の翌日の午前中。

暗転が開けると、徹が、タカシにゴルフのスイングを教えている。

徹は、鼻で、タカシに姿勢の指導する。

徹 そうそうそう。自然に、自然にそうそうそう。

タカシ (体に対して) あーなるほど。あれなんでしたっけ？

徹 そんな時は。仕事が忙しかったもんで。

タカシ ああ。

徹 もう朝早くから、夜は12時超えるのなんか当たり前だったよ。

タカシ えーマジすか。

徹 そう。給料も安くて。あ、腰。

タカシ あ。

徹 でも、楽しかったや。そんな時は。

タカシ へー。

徹 やりたい仕事かね、できとったもんで。役職ついて管理職になると、いろいろ気を
使うことが多い。

タカシ やだったんすか？

徹 まあね。ゴルフも始めさせられて。あ、ひじひじ。

タカシ あー、そうだ。出ちゃうんすよね。

徹 わかる。野球やってた人は、当てに行っちゃうだな。

タカシ あれ、やってたんでしたっけ？

徹 昔、まあ、ちよつと。

タカシ え、今度、グローブ持ってくるんで、キャッチボールしましょうよ。

徹 そんな。

タカシ 軽く、軽くです。

徹 いや……軽くよ？

タカシ もちろん。もちろん。

徹 久々だよ。大丈夫かや。

会話の最中、明利、スーパーの袋を下げて登場。

袋の中には、大量の生鮮食品が入っている。

明利は、農作業用と思われる、汚れても良い服装。

明利、入り口の扉に手をかけ、鍵がされてないことを不審に思いながら、扉を開ける。玄関には、タカシの靴。

明利、玄関から上がる。居間の二人を見て。

明利 何してんの？

間

タカシ あ、すいません！ 自治会の。

明利 (徹に) 何してんの？ 人上げるなって言ったよね。

徹、当惑した表情。
間。

タカシ ごめんなさい、僕が合鍵で。

明利 合鍵？

タカシ はい。あの、好きな時に来て、寛いでいいって言われてたんで。

明利 返してもらっていい？

徹 そんな、いきなり。

明利 黙ってて。返していただけますか？

タカシ 鍵を出す。

タカシ 自治会の集まりの出欠聞きに来ただけで。

明利、タカシの鍵を取る。

タカシ お邪魔しました。

タカシ 帰ろうとする。玄関で引き止める明利。

明利 ちょっと待って。えっと。

タカシ あ、タカシです。

明利 タカシくんには、どう見えてる？

タカシ どうって？

明利 君には、あれが、人に見えてる？ それとも、象に見えてる？

タカシ、玄関より徹を見る。間。

タカシ あ、象ですな。

間

明利 だよな。

タカシ でも徹さんですよ。

明利 そう。

タカシ 徹さん、象になっちゃったんですか？

明利 ……そう。

タカシ ああ。

間

明利 え、ちょっと待って、君は、君は、しよっちゅう、その、うちに来てたんだよね？

タカシ しよっちゅうって言うか、はい。たまに。

明利 いつから？

タカシ えっと、半年前ぐらいですかね。お兄さんが転勤したって聞いたんで。それで。

明利 頻度は？ どれぐらい？

タカシ ひんど。えっと。

明利 週一とか、月一とか。

タカシ いや、月一よりは多いですけど。でも、そうですね。週一は、いや、二の週も。

明利 今日までは？ 最後に来たのはいつ？ 何か、兆候とか、なかった？

タカシ ちよ、ちよう。

明利 兆し。象になってる。体大きくなってるなとか、鼻伸びてんな。とか。

タカシ 鼻。

明利 鼻じゃなくても、その前触れみたいな。

タカシ うーん。

明利 だんだんこうなったのか、それとも急にこうなったのか。

タカシ ごめんなさい。いっぺんに聞かれると、その。

明利 申し訳ない。最近、きた時は象にはなってなかった？
タカシ いや、それが、どうだったか。えー。

徹、この会話の最中に、明利が買ってきたスーパーの袋を漁っている。
徹、りんごを取り出し。

徹 これは食べてもいいのかん？

明利 ちよつと待ってて！ 後で切るから！

徹、りんごをそのまま食べ始める。

タカシ だって、でも、ほら、あの、今日から象になりますよって言われたら、ああ、じゃあ、僕もそういう、気持ちでいよっていうか、そうやって接しよってなりますけど。でも、そんな、何にも言われなかったら、僕も、普通に、普通の徹さんだと思っちゃいますし、そう接しちゃいますよ。

明利 いやいやいや、だって。

徹、りんごを見つめ。

徹 食べてもいいのかん？

明利 だから、待ってって！ (タカシ) わかった。もういい。

タカシ すいません。

明利 君の、お父さんは、このこと知ってる？

タカシ いや、多分。知らないと思います。

明利が考える間。

明利 わかった。こうしよう。君は、何も見ていない。

タカシ 何も？ 何もっていうのは。

明利 じゃあ、親父は、見た。見たね。

タカシ 見ました。はい。

明利 しかし、親父には、特に変わった様子はなかった。

タカシ はあ。

明利 親父と君は会ったけど、いつもと変わらない、元気な人間の姿だった。当然だ。象になんてなってないんだから。

タカシ え、象にはなってるんですよね？

明利 なってる実際は。だが、なってないことにしたい。僕は、というか僕たち家族は。
タカシ はあ。

明利 想像してくれ。君のお父さんが知らない間に象になってたらどうする？

間

タカシ 面白いですね。

明利 面白くない。面白くないよ。実際なってみろ全然面白くない！

タカシ すいません。

明利 いい。ごめん。もし、象になっているって周囲に知れたら、大ごとだ。他の人も心配で、集まってくるかもしれない。

タカシ ああ、はい。

明利 それは、避けたい。やだろ？ みんなに、心配されるの。

タカシ はい。はい。

明利 だから、問題ない、大丈夫ってことにしたい。特に変わった様子はなかった。

タカシ わかりました。

明利 親父は、元気で、いつもと変わらなかった。

タカシ はい。

明利 一緒に。

タカシ・明利 親父／徹さんは、元気で、いつもと変わらなかった。

明利 君は何を見た？

タカシ 何も見てないです。

明利 よし。帰っていい。

タカシ (つぶやきながら) 徹さんは、元気で、いつもと変わらなかった。

タカシ、帰っていく。

明利は、居間へ。

明利 後で切るって言ったじゃん。

明利、徹の持っているりんごを取り上げる。

明利、スーパーの荷物を持って、台所にいく。

徹、明利がいることを不審に思い、きよろきよろし、考える。

その後、シーン冒頭より徹の近くにあった水入りのバケツに鼻をのぼし直接飲む。うまく飲めないために、すこし周囲にこぼしてしまう。

明利、洗面器に、水、タオルを入れて登場。

明利 ああ、こぼしちゃってるし。もう。

明利、バケツを避けて、床のあたりを絞ったタオルで拭く。

徹 ごめん。

一瞬の間。

明利、タオルを洗面器につけ、絞る。

明利 体、拭くから。
徹 うん。

明利、濡れタオルで、徹の体をこする。

徹 お前、いつ帰ってきただ。

明利 スーパーで買い出して、今。

徹 ほうかん。

明利 ほう。千春も帰ったから。

徹 うん。

明利 挨拶していくって言ったけど、昨日もう寝とったら。

徹 ああ……

明利、タオルを濡らす。

徹 で……誰だん？千春ちゅうのは。

明利、止まる。タオルを絞らず、滴り落ちる水。

以下は、この後の時間経過。

明利、鍋とバケツを台所に持っていく。

バケツをもって戻ってくる明利。台所の方からゴミを玄関の方へ持っていく。徹はぼーっとどこかを見ている。テレビをつける明利。

テレビを見ている徹を確認し、仕事のため玄関へ移動して作業を始める。

徹、テレビをしばらく見ていたがリモコンを手に取り、チャンネルを変え

ようとするが、象であるためうまく変えられず音量が上がリ、チャンネルが何度も変わる。

明利、異変に気付き居間に戻り、リモコンを取り上げテレビを消す。

明利 寝とって。

明利机を移動し、座布団で徹の寝床をつくる。

徹が横になったので離れようとするが、家の電話が鳴り明利が切る。

徹が寝たので、玄関に行つて作業をする。

徹、起きだしてファイルを出しては、放つていく。

その音に気付いて明利が居間に戻つてくる。

ばら撒かれたファイルを拾う明利。

明利 もう寝とって。

徹 ああ。

テレビの前に座布団を移動させて寝ようとする徹。

徹 あれ、お前……。まあ、ええわ。

徹、寝る。明利、眠ったことを確認し座り込む。

すると、ポケットの携帯に着信が来る。

〈二場〉

前場の夜。徹、居間で寝ている。※注：象は立ったまま寝る。

部屋の電気は暗く、落ちている。

明利、小声でプロデューサーと電話している。

明利 書き直します。もちろん。はい。です、ね、葛藤が、はい。芯食つてないというか、

はい、周囲とも関係も、ちゃんと向き合ってる感じが無いのは、はい。僕も。……

可能であれば、一週間いただく、の、は、長いですね。ですね。明日！？ 明日は

：

大村、タカシを連れ立って登場。タカシは大きな水筒持参。

明利の電話を遮るように、大村、扉を叩く。

大村、扉が開かないので、タカシに合鍵を求め。

タカシ、ポケットを探るが、ないことに気づく。
大村、タカシの鍵を待ちきれずに、扉を叩く。

大村 徹さん！ 徹さん！

明利 3日後、はい、無理じゃないです。あの、はい。もちろん。お願いします。

明利、急いで戸を開ける。

明利 なんでしよう。

大村 まだおったのかん。

明利 ご用件は？

大村 もう始まつとるから、呼んで。

明利 始まつてる？

大村 だ、集まり。自治会の。

明利 ……あ、今日。

大村 そうだよ。確認にいかせたにん。

明利、大村の指す方を見ると、タカシが立っている。

大村 元気だつて言うもんで、てっきり来ると思つとつたら、全然来んじゃん。

明利 ああ……そうか。

大村 何、寝とるの？

明利 ……はい、風邪がぶり返しちやって。

大村 ええ！？

明利 はい。タカシ君が帰つたあと、急に。

大村 (タカシに大声で) お前、ちゃんと見とけよ！

タカシ ごめん。

大村 じゃあ、まあ、ええわ。名簿だけもらえる？

明利 名簿。

大村 盆踊り大会の名簿。ステージ上がって踊る団体のやつ。徹さんが管理しとつたから、それないと始まらんよ。ん？(匂いに)

明利 なんですか？

大村 牛とか飼つとらんよね。

明利 いや、飼つてないすね。

大村 ほう？

明利 (タカシに) ね。

タカシ 牛、飼ってない。

大村 (明利に) ちゃんと面倒みとるよね、徹さんの。

明利 はい。もちろん。

大村 ええわ。(タカシに) もらってこい、名簿

タカシ ああ、うん、えっと。

大村 なんだ、お前、どうしただ？

明利 あ、聞いてきます。聞いてきます。

明利、居間に行く。

大村、玄関に腰をかける。タカシは、心配そうに立ったまま。

明利 親父。親父。

徹 ん？

明利 名簿、どこ？

徹 あ？

明利 名簿、どこにある？

徹 名簿？

明利 盆踊りのやつ。

大村 (座ったまま声かける) あの、ステージで踊る団体の、あったでしょう！

徹 あれ、大村さん？

明利 そう。名簿、どこ？

大村 連絡ぐらい、頂戴よ。もう集まり始まつとるで。

徹 ああ、ごめんごめん。

明利 いいから。名簿。

大村 徹さん来んもんでみんな困つとるよ！

徹 今、今行くもんで。

と、徹が動こうとする。

明利は、徹を必死に抑える。

明利 行けないだろ！ こんな体じゃ！

徹 何を。着替えてすぐ行くで！

明利 行けないって！

徹 (明利に) ちょっと離してくれんかや！

明利 待ってって親父！ 待て！

大村は、腰を浮かし、家にながろうとする。
タカシその動きを見て、靴を脱ぎ、居間に上がっていく。

徹 (明利に) 誰だん? あんた?

間

大村、腰をおろす。

タカシ 徹さん?

タカシの声で、徹、止まる。

徹 あ、来とったのかん。

タカシ ごめんね。あがしてもらったで。

徹 いいよ、いいよ。

タカシ 名簿、あつたら? 青いファイルに入れてた。

徹 ああ、うん。

タカシ あれをね、ちよつと、借りたいただけ。

徹 うん、いいよ。

タカシ どこにあるか、教えてもらえる?

徹 えつとな。電話の下の。

タカシ うん。

と言いながら、タカシ、場所を探っていく。

徹 一番左。

タカシ あつた。ちよつと借りてくでね。

徹 うん。

タカシ 徹さん、寝とつたら。ごめんね。

徹 いいよ。いいよ。

タカシ 大丈夫だで。うちらでやつとくで。徹さん、寝とつていいよ。

徹 ほうかん。うん。

徹、寝る。

タカシ、明利に軽く頭を下げて、玄関の方に。

大村、タカシからファイルをひったくり、家を出る。
大村とタカシ、玄関を出た外での会話。
明利、スマホから電話をかける。

大村 あんなに悪くなっとっただか。
タカシ いつの間にか。

大村 まだ若いのに。ちゃんと見とけつつたろ！

大村、怒りに任せて水筒をタカシから奪う。
タカシは怯えるが、大村は麦茶を飲む。

大村 この家にはもう来んていい。
タカシ 何で急に。

大村 バカが。今更畑返せとか言われたらどうするだ。

大村とタカシ退場。

明利、電話が繋がらないことに苛立ち、切る。

明利 クソ兄貴。

暗転。

〈三場〉

以下は、イメージシーン。
寝ている徹。雅史がやってきて、徹の足に、鎖をつけ、家の大黒柱と繋ぐ。
明利は見守りカメラをセッティングして、その映りをチェックする。
徹が目覚めるが、二人の顔は確かに識別できない。

徹 (雅史を見て) にいちゃん？

雅史、はすぐに去る。徹、鏡を見つける。鏡をみると、そこには象の姿。

徹 (驚き、怯え) どうちゃん。

しかし、鏡は消える。

以上がイメージシーン。

次の日の夜。家の外。雅史は見守りカメラを見ている。
比較して、明利は特に疲れている様子。

雅史 交代で寝よう、様子を見ながら。
明利 先に、これからのことを決めたい。

間

明利 昨日、プロットの直しの連絡が来た。でも全然対応できてない。
雅史 今からは、できないの？
明利 は？
雅史 親父も寝てるし、多分、何も。
明利 俺が寝れてないんだよ。昨日は二時間ごとに起きて、母さんの名前を呼んでた。今朝も今朝でうんこに、飯。飯にうんこ、うんこうんこ飯！
雅史 わかった、お前は先に寝ていい。

間

明利 根本的に、見下してる。俺を、俺の仕事を。
雅史 それは違う。
明利 何が、どう違う。今からできないのかって言ったよな。兄貴はできんのか、一字一句ミスれない取引先とのやりとりを、一日中象の世話をした後の朦朧とした頭で！
雅史 悪かった。発言は取り消す。
明利 取り消せねーのが、発言だよ！ 言葉だよ！

間

雅史 いったん落ち着け。
明利 やめろその口調。
雅史 あ？
明利 スマしてんだか知らねーけど、イライラする。
雅史 冷静でいる必要がある。判断をする時には。
明利 え？ わかってるぞ。親父の世話を押し付けるつもりなんだろ。

間

雅史 俺は今まで、親父にできることはしたつもりでいる。大学も親父の言う通りに地元
のを選んだし、支店の配属希望もなるべく実家から近いところを出した。母さんが
いなくなっただけからは、定期的には顔を出すようにした。全部、お前のかわりに親父
を安心させるためだ。

間

雅史 冷静に今後の対応を話したい。
明利 わかった。
雅史 生活がある、俺も、お前も。なら、選択肢は一つしかない。
明利 選択肢？
雅史 親父を、警察に引き渡す。

間

明利 は？
雅史 作戦を話す。
雅史 色々調べたが、今の俺たちの状態は、客観的に見て、法に触れてる。詳しい罪名は
忘れたが、何の届出もない象の飼育は、違法飼育にあたる。3年以下の懲役か、1
00万円以下の罰金。またはその両方。俺は犯罪は非常に困る。会社での立場がな
い。

間

雅史 結論から話す。俺たちは「知らぬ存ぜぬ」を押し通す。親父は象になんてなってい
なかつた。俺たちは知らない。被害者だ。誰かがいたずらか、勝手に密輸かした。
普通は人が象になったとは思わない。通報を聞いて駆けつけた警察は、親父を保護
する。

明利 そんなにうまくいく。
雅史 わけないと思ってる。でも、それしか選択肢は残されてない。
明利 事情聴取とかさ。
雅史 シラを切り通す。口裏を合わせて。
明利 タカシくんが見てる。
雅史 一人だけならたわ言で済む。

間

明利 象が話してるのはどうなる？ また暴れたら！？

雅史 そうだな。

明利 そしたら。

雅史 無事に保護される確証は、ない。

間

明利 わかった。

雅史 仕方がない。

明利 親父の世話は、俺がする。

その時、象の大きな鳴き声。

徹が目覚まして暴れている。

徹 けいちゃん？ けいちゃん！

明利と雅史、モニターを確認し、急いで退場。

暗転

〈四場〉

十年前。この家に、徹が引越して来た日の夕方。

(明利は22歳。雅史25歳。徹は53歳。)

徹は、頭にタオルを巻いた、薄着。

徹 (台所に) けいちゃん！ けいちゃん！ あの、蕎麦頼んどいてくれん！

徹が、グラスとビールを持ってきて、ビールを開けようとする。

すると、段ボールを持った、雅史が登場。

雅史 これは？

徹 ん？(箱の中を覗き) ああ、そこでええわ。

雅史 なるべく片しちやっただ方がよくない？

徹 いいいいい。お前も、飲め。

と、徹はグラスにビールを注ぎ、雅史に差し出す。

雅史 (台所に) 母さん、先始めてるよ！

グラスにビールを注ぐ、雅史。

徹 ああ、どうもどうも。

雅史 いえいえ。

徹 ああ、もう、それぐらいで。はい。

雅史 いいんですか？

徹 もうちよつと。

雅史 はいはい。

徹のグラスにビールが注ぎ終わり、乾杯しようとする。

徹 明利は？

雅史 車でなんか本読んでた。

徹 なんだ、あいつはまた。

雅史 呼んでくる？

徹 ええわ、まあ。引越し蕎麦頼んだから、それ来てからで。

雅史 じゃ、先にやりますか。

徹 はい。お疲れ様です。

徹と雅史、乾杯する。

徹 やけに板についとるじゃん。

雅史 一年目なんで、お酌して回るのが仕事ですよ。

徹 ええぞ。出世するぞ。爪の垢煎じて、あいつに飲ませんとな。

雅史 お酌される方だから。脚本家先生は、

徹 (鼻で笑い)

雅史 へそ曲げてたよ。

徹 何が。

雅史 引越し。勝手に決められたとかなんとか。

徹 出やせんぞ。電話しても。

雅史 意外とシヨック受けてんだよ。

徹 何が？

雅史 いや。実家がなくなったわけだから、センチになってるんじゃない？ 最後家出る時、泣いてたんだよ。

間

雅史 家、売ることなかったんじゃない？

徹 ……リフォームしようと思ってな。

雅史 リ？ え、ここを？

徹 落ち着いたらな。バリアフリーに。おばあさんもその方が良いだろう。まあ、これが、実家に何もできなかった俺の、最後の親孝行だな。

明利、登場。大学生らしい服装。

明利は「経営者一族の物語」的な、ビジネス関係の書籍を数冊持っている。

明利 これ、借りてっていい？

徹 あ？ ああ。全部か？

明利 まずかったらやめとくけど。

徹 やや、持っけて持っけて。

明利 返すのいつまでとか。

徹 ううん。やるやる。会社に買わされたやつで、もう、読みやせんわ。

明利 そう。

徹 (嬉しそうに) なんだ、参考にするのか？ 脚本の。

明利 別に。

と、明利、再び車の中に行こうとする。

徹 あ、お前、もう蕎麦くるぞ！

明利、退場。

この会話をしている最中に、雅史は、先ほどの段ボールから、作文の書かれた原稿用紙を取り出し出している。作文の角には、「佳作」のシール。

雅史

「お父さんは、家にいる時は、いつもごろごろして、何か食べています。それと、お父さんは、とても大きいです。だから、僕はたまに、お父さんは、象みたいだなって思います。」何、これいつの？

徹 ああ、小学校の。
雅史 佳作とってんじゃん。
徹 昔から文才はあっただ。あいつ
雅史 夏休みに、のんほいパークに行ったら、象がいました。のんほいパークは、前は何
頭も象がいたのだけど、今は、一匹だけしかいないと、説明で書いてありました。
かわいそうだなって思いました。」

間

徹 まあ、ダメになったら、帰ってきて農業するだ。
雅史 できる？ あいつに。
徹 やるしかないだろ。俺らが死んでも、食ってかにかいかんだ。
雅史 親父、甘い。
徹 不公平か？
雅史 いや、別に。(おどけて) 長男だしね。
徹 (苦笑い) そうだ。長男だぞ。
雅史 (立ち上がり) ばあちゃん、起こしてくるよ。
徹 ええわ。俺行くで。
雅史 いいよ。飲んどって。

雅史、退場。

間。

徹、ビールを飲み干す。

徹 (台所に) まだビール冷えとる？ ……けいちゃん？
徹、台所にいるが、妻の姿が見当たらない。
徹、急に不安になり、家の中を歩き廻る。

徹 けいちゃん？ けいちゃん？
歩き回る徹の足を、鎖が引き止める。
徹、鎖を辿りながら、家の柱を確かめ、周囲を見渡す。

徹 ここ、どこだよ。……けいちゃん！ けいちゃん！

〈五場〉

二幕三場のすぐあと、夜の居間。
徹は、鼻を振りながら暴れている。動こうとするため、チェーンが家の柱を軋ませ、家が揺れる。
徹をなだめようと必死になっている兄弟。
この時、家の戸は開いたまま。
明利と雅史、鼻を掴んでいる。

明利 親父！ 親父！

明利は、鼻に振り解かれる。

雅史 親父、俺だよ！ 雅史！

徹、雅史の匂いをかき、落ち着き始める。

雅史 そう。寝ぼけてただな。うん。寝ていいで。大丈夫。大丈夫。

雅史、徹の鼻を撫でている。

明利 ……。

大村、登場。一度、タカシに止められるが、それを力づくで振り解く。
タカシの顔は、殴られた跡。
大村玄関から上がって行き、徹を見て、止まる。
明利と雅史は、大村を見て、止まる。
大村、明利と雅史を一瞬見るものの、兄弟から距離をとりながらスマホを出す。

雅史 ちよ、ちょっと待って下さい。

明利、大村のスマホを奪おうと、大村の手を持つ。
スマホを奪われまいと抵抗する大村。
それを見て、雅史もスマホを奪おうと加勢する。

三人がもみ合う。
明利は、タカシを見つけ。

明利
タカシくん！

タカシ、一瞬迷った後に、大村の手からスマホを奪う。
大村は、抵抗をやめ、兄弟を引き剥がす。

大村
どういうことだ！

雅史
あの！

大村
こんな、こんな！ え！？

徹
(鳴く)

雅史
すいません！ 声は、あの、興奮してしまうかもしれないので。

間

徹も興奮が収まりきっておらず、鼻息が荒い。

大村
馬鹿げとる。

大村、タカシの方に手を向けると、タカシが距離をとる。

大村
返せ。

タカシ
(首を振る)

大村
どういうつもりだ。

明利
すいません、これは。

大村
あんたと話すつもりはない。(タカシに)返せ。

間

大村
タカシ！

タカシ
返したら、通報するら。

大村
(ため息)

タカシ
じゃあ、返せん。

大村、タカシを殴ろうと近づく。

タカシ　　そういうとこだで！俺、嫌いだ。あんたが。徹さんの方がずっといいお父さんだ。優しくて、理解があつて。

間

タカシ　　俺、決めた。今決めた。大学生になる。

大村　　は？

タカシ　　農家は継がん。

大村　　（明利に）あんた何吹き込んだだ。

タカシ　　何も吹き込まれとらん。俺は、俺の意思で、決めただ。

大村　　いい、その話は後で聞く。

タカシ　　聞かんだろう。そう言つて。

大村　　聞く聞く、聞くわ。

タカシ　　じゃあ通報、せんね？

大村　　バカ。それとこれとは。

タカシ　　じゃあ返せん！

大村　　お前。

タカシ　　だつて、通報したら、徹さん、どうなる？

大村　　知らん。

タカシ　　知らんつてなんだ。薄情だに。

大村　　こんなんがお隣におつてみる、夜も眠れん。

タカシ　　俺は眠れるよ。

大村　　バカが。

大村、再びタカシを殴ろうとする。兄弟が動く。

タカシ　　だつて、徹さん、可哀想だ。ずっと一人で暮らしてただに？話したがってた、徹

さん。雅史さんとも、明利さんとも。ずっと。

大村　　徹さん徹さんつて、これは象だろバカが！

タカシ　　聞いてみたらええ。（大きな声で）徹さん！

大村　　いい！いい！暴れたらどうするだ。

タカシ　　暴れんよ。（明利に）ねえ。

大村　　いい。余計なことせんで。（雅史に）こんな、どうするつもりだっただ？

明利　　俺が、世話を

大村　　（雅史に）どうするつもりだっただ？

雅史　　ここに居続けさせるのは、現実的ではないと思つてました。

大村 ほうだら。

雅史 なので、どうしようかと弟とも相談してまして。

大村 相談。まあ、ええわ。ほいで？

雅史 ……少なくとも、近日中に、処分を決めようと思っています。

明利 ちょっと待て。

大村 近日っていつだん。今日かん？ 明日かん？

雅史 なるべく早く。

明利 (雅史に) ちょっと待て。(大村に) 父は僕が面倒見ますから。

雅史 もうその段階の話じゃない。

明利 あの、本当に父なんです。一見するとわかんないかもしれませんが、話も通じるし、理解できるんです。(タカシに) な？ そうだよな？ だから、そんな、心配する様なことは何一つ。(徹に) 親父、親父。わかるだろう？ 大丈夫だよな？ ちょっと今、ほら。喋って。喋ってくれたら、大村さんもわかってくれると思うから、親父。親父。親父。

徹、呼びかけられても、当惑した表情を浮かべるだけ。

雅史 (明利に) 頼むから、黙っててくれ。

大村 (雅史に) あんたらとは仲良くしたいだ。

雅史 ありがとうございます。

大村 でも、道理ってあるら。隣近所に何も言わずに勝手に象を飼うのは、

タカシ (遮り) これは徹さんだ。

大村 (無視し) どうなの？ 何の問題もないの？

雅史 ……いえ。

大村 だら？

雅史 はい。

大村 道理は、通さなきゃいかんね。

雅史 はい。その通りだと思います。

大村 俺も、もう見ちゃったからには、知らんぷりはできんよ。自治会での立場もあるで。

雅史 本当に、申し訳ございません。

大村 ほうね。ほれがまずあるね。ほいで、どうするだん？

間

大村 俺が見てないなら、自分で言うだね。警察にちゃんと。

雅史 はい。

大村 ほれ、電話。今すぐ。

間

雅史、スマホを取り出そうとして。

明利 明日、明日必ず、自分たちでいいいます。

大村 ……何時？

明利 午前、9時までには、必ず、自分たちで。

大村 信じれん。あんたは。

明利、大村に土下座をする。

明利 どうか、お願いします。

大村 (雅史に) 9時までに動きがなかったら、我慢できんよ。

雅史 はい。

大村 (タカシに手を伸ばし)

タカシ 俺が見る。徹さんの世話を

大村 もうその話はしとらん。

タカシ だって。(明利に) いいんですか？

明利、タカシと目を合わせない。

タカシ、力が抜ける。

大村、タカシの手から、スマホを取る。

大村 (タカシに) たわけ。

暗転。

〈六場〉

前場の翌朝。

以降、この場は徹視点で始まる徹が認知すること、ものが見えてくる。徹が寝ている。それを起こす、明利の声。

明利 親父、親父

徹 ん？

明利 朝だよ、起きて
徹 朝？
明利 そう。見て、明るいでしょう

徹、周囲をきよきよとするとする。
徹は、周囲の明るさにもピンと来てない。

明利 明るいでしょう
徹 ほうね。うん。
明利 ちよつと起きて
徹 うん。

徹、ゆつくりと起き上がる。

明利 あのね、ちよつと話したいことがあるだよ。いいかん
徹 うん
明利 ……俺が、誰かわかる？
徹 うん？
明利 俺、わかる？
徹 わかる、わかるよ。
明利 名前、言える？

徹、考えている間に沈黙。

明利 名前。
徹 うん？
明利 僕の名前、言ってみて。

徹、明利の顔を眺めた後、思い出そうとする。

徹 ええつとね、うん、わかるだよ。ええつと。うん、うん、ごめんね。ごめんね。
明利 ……明利
徹 あ？
明利 (ゆくりと) あきとし
徹 (ピンと来て) ああ、なんだ、あきとしか
明利 そう。明利だよ。あんたの次男の明利、わかる？

徹 わかるわ。元気にしとったか
明利 元気に、しとったよお。

舞台、居間がゆっくりと照らし出される。

徹 ほうかい。元気ならいいだよ。
明利 うん。

徹 (どこかに向かつて) けいちゃん、あきとしが帰ってきたに！

明利 親父、あのね。

徹 けいちゃん？ けいちゃん！

明利 (少し大きな声で) 親父
徹 ん？

明利 あのね、ちよっと、話したいことがあるもんでね。聞いてくれる？

徹 おう。おうおう聞くよ。

明利 僕、ずっと東京おったら？

徹 うん。おった。

明利 今もおるだけどね、でね。

徹 いつ帰るだ？

明利 え？

徹 いつ帰るだ。新幹線

明利 まだわからん

徹 言えば、車で送ってってやるで。

明利 ありがとう

徹 お金、もらったか？ けいちゃんから

明利 うん。あのさ、俺、脚本家目指しとったら？ 大学から、ずーっと

徹 あ？

明利 脚本。脚本家、書く人。台本を、書く人

徹 ああ、うん。うん。そうだな。書く、うん、だい、うん

明利 書く人。ずっと、目指しとってね。今も頑張ってるんだよ

徹 ああ、ほうかん

明利 それでね。脚本の仕事でね、なんとか、食っていけそうだから。

徹 うん、うん

明利 だから、何も心配しないでいいでね。

徹 就職はするだら？

明利 …… (小さく) せんよ。

徹 会社にまだ席残つとるもんで、あの、聞いてやるわ。これでも、お前、俺、偉いだ

ぞ？ けいちゃん、電話！

徹、電話を探す動きのうちに、何を探しているかわからなくなる。

明利 ありがとう。親父、心配してくれて。食っていけるで、大丈夫だよ

徹 あれ？ けいちゃん？ あれ、どこだったかな？ あの……

明利 でも、もう大丈夫です。ちゃんと食ってけるで、安心してね。

徹 (ぎよつとし) ……あんた、誰だん？

間

徹 (探すように) けいちゃん？ けいちゃん！

千春、玄関の扉を開ける。

居間から距離をとって座っていた雅史、即座に反応する。

徹 (音で気づき) けいちゃん？ どこ行つとつただ？ ちよつとあの、どなたかや

けいちゃんのお友達かや。お茶とか、その、出すべきかや

徹、千春を、自分の妻と勘違いしている。

千春、雅史の顔を見ると、頭を下げる。

雅史、明利の顔を見た後に、千春に軽く頭を下げる。

徹、次第にそれが自分の妻でないことに気づく。

徹 あれ、あんた……

千春、状況を見て、徹の容態を察する。

千春 千春と言います。(頭を下げる)

徹 ああ、あの、どうぞ、くつろいで。もうすぐうちの帰ってきますから

明利 誰かに見られたりしとらんよな？

千春 してない。

徹 けいちゃん？ けいちゃん、どこいっただ？

間

雅史 (徹に) 親父。明利の、奥さん来たで。
徹 あ？

雅史 次男のね、明利の奥さん。
徹 ……明利の。

明利 そう。奥さん。千春さん。
千春 お父さん。よろしく願います。

徹 おお。うん。(明利に) 結婚するんですか？ 明利は。
明利 ……うん。結婚するよ。

徹 ほうですか。あの、不出来な息子ですが、優しいやつなので、どうぞ、よろしくお
千春 願います(首を垂れる)
こちらこそ、よろしく願います。

千春、頭を下げる。

明利 それでね、お腹に
徹 (千春に) じゃあ、就職はしたんですか？

雅史、時計を見る。

千春 (徹に) あの、お父さん
明利 (千春を制し) ……ごめん

明利、深呼吸する。

明利 (徹に) ……明利さん、就職、したよ。
徹 あ……ほうですか。
明利 ほうだよ。

徹 ちゃんとした会社ですか？
明利 ちゃんとした会社。
徹 ほうですか。

明利 結婚するだもん。食わせてかにならんからね。
徹 ほうですか。……就職、したんですか。

明利 うん。だもんで、なーんも心配ないでね。
徹 ……(誰に言うでもなく) 結局俺の言う通りにさせちゃったな。

徹、象らしきひと鳴き。

間

明利 ……親父？

その時、何台ものパトカーがサイレンを鳴らして来ては、止まる音。

雅史 (外を見て) まだ9時前だぞ。

明利 千春、裏から。

千春 いい。いる。ここに。

取り囲んだ警官隊が拡声器で話しかけてくる。

声 「近隣の方から、害獣の通報がありましてお伺いしました。お家の方どなたかい

らっしゃいましたら、出て来てお話を聞かせてください」

雅史 約束が違うじゃねえかよ。

声 「繰り返します。どなたかいらっしゃいましたら、お話を聞かせてください。」

雅史が腹を決めて立ち上がる。

明利 俺が行く。

雅史 いい。俺が言っとうまいこと。

明利 無理だろ。もうどうやっても。

声 「お家の方！」

明利 (警官隊の声に応え) すいません！ 今行きます！

明利は、徹の足をつないでいる鎖を解こうと手を掛ける。

雅史 お前、何を。

明利 (千春に) ごめん、ちょっと迷惑かけるかも。

明利、徹の足に繋がれている鎖を解く。

明利 (徹に) 歩ける？

雅史 待て。(警官隊が) あっち銃持ってたぞ！

徹、ゆっくり歩き出す。

明利、徹の鼻を優しく持ち、家の玄関に向かう。

徹、家の玄関を破壊しながら、家の外にでる。

警官隊が、銃を構える音。

明利　どうか、銃をおろして、話を聞いてください。……この象は、大変温厚です。危険ではありません。手荒い事だけはしないでください。

声　「そちらの方、危険ですから象から離れてください！」

明利　この象を安全に保護すると約束していただくまでは、僕はここから離れることはできません。どうか、約束してください！」

声　「危険です！　離れてください！　こちらには発砲の用意があります！」

明利　約束してください。これが、僕にできる最後の親孝行かもしれないんです。この象は、不器用ですが、家族思いの、優しい、優しい象なんです。

声　「いまいち意味がわかりません！　発砲します！　離れてください！」

雅史　一回離れろ！

声　「中にいらっしゃる方も、危険ですので、避難して下さい！」

明利　皆さんには、今、これが、危険な大型動物に見えていることと思います。ですが、どうでしょう。彼は僕の隣で、先ほどからじつとじてくれています。きちんと話さえずれば、わかってくれるんです。どうか、銃を。

銃声。徹に銃弾が命中する。徹は興奮し、鳴き声を上げて警官隊の方に向かうとする。

明利　親父！

暗転。

〈七場〉

実家・居間一年後の盆。

暗転、開けると、整理された実家の居間をタカシが簡単に掃除している。徹の姿はない。

雅史、登場。手に紙袋を持っている。鍵を開けようとするが、扉が空いていることに気づき、静かに中に入る。

雅史　え、ごめんごめん！

タカシ ああ！ どうも。

雅史 いいよ、俺やるから。

タカシ あ、いや、なんとなくやってるだけなんで。

雅史 そんな、今日来るって言ったじゃん。

タカシ 本当に、なんとなくなんで。

雅史 えー。あ、これ、つまらないものだけど。

雅史、紙袋を差し出す。

タカシ え？

雅史 後でピンポンして渡そうと思ったけど。大村家の皆さんにも。

タカシ すいません、わざわざ。

雅史 あと、今のうちに。

と、謝礼と書かれたノシ袋を差し出す。

タカシ 謝礼？

雅史 本当に、気持ちだと思って。この一年の。

タカシ いえいえいえいえ！ そんな！

雅史 いいから、いいから！

タカシ いや、これは受け取れないす。

雅史 本当に、申し訳ないと思ってるんだ。好意に甘えてしまって。草むりしもやってくれてたの？

タカシ 暇な時にちよいちよいって感じで。

雅史 ごめんね。事情聴取やら、親父の失踪宣言のことやらで、バタバタしっぱなしで。

タカシ 認められたんですか？

雅史 なんだ、失踪したってなってから、7年経たないと受け付けられないんだと。

タカシ 7年。

雅史 だから、あと6年ちよつとは、公的に親父は死んだことにならない。相続のことも。

それから家も、畑も。

タカシ どうするんですか？

雅史 畑は、大村さんにお渡しして。となるとこの家も、手放すことになるだろうな。

タカシ ……すいません。

雅史 (首を振り) 一年、ありがとう。

明利・千春、ベビーカーを引いて大荷物で来る。

タカシは雅史からの謝礼を受け取らず。

タカシ あの、俺

その時、玄関の扉を開ける音。

雅史、半ば無理やりタカシに謝礼を握らせて。

明利 ただいま。

雅史 遅えよ。

明利 し！ 今寝たところだから。

千春 ごめんなさい。 途中の駅で授乳室寄ってたら、乗り遅れちゃって。

雅史 あ、いや！ そんな。大丈夫大丈夫。

タカシ お久しぶりです

明利 おお！

雅史 (耳打ち) 掃除してくれてたんだよ

明利 え！ ごめん！ 今日ぐらい俺がやったのに。

タカシ いえ、そんな。ちょっと、見てもいいですか？

タカシ、間近で赤ん坊を見る。

タカシ 本物はやっぱり、可愛いですね。

明利 でしょう。

タカシ 大変って言いませんか？ 男の子。

明利 まあ、これから？

雅史 (明利を差し) 大丈夫？ ちゃんとやってる？

千春 はい。もう夜はぐっすり寝させてもらってます。ね。

明利 (自分を指し) 一番、時間に融通効くからね。書きながら見守りだよ。

タカシ 見ました。あのドラマ、深夜の。Tverよ。

明利 / まあ、一応地上波デビュー。Tverじゃ。

タカシ はい。知ってる俳優さん出てて、すげえって思いました

明利 Tverか。

千春 朝早いですもんね？

明利 だよ、だよ。Tverか。なんだろうね、ちょっとTverかってなるね。

千春 いいじゃんもう。

タカシ あ、でも、グツとききました、あの夜中に奥さんの入院先を訪れるシーンとか。

明利 ああ、あそこね。

タカシ 本当はもつと一緒にいたいんだろうなって。

明利 (苦笑しそうに) いい出来だったね。

タカシ はい。

千春 プロデューサーさんのアイデアなんですって。あそこ。

明利 本当は、昼間に仕事投げ出すシーンだったんだけどね。

タカシ え、すごいすね、明利さんのプロデューサーさん。

明利 他にいいシーンあった？

と明利が言っている最中、赤ん坊が泣き始める。

明利 あらららら。

明利がベビーカーをゆすり始める。

千春ベビーカーから、赤ん坊を抱っこしながら、

明利、ベビーカーからおむつが入った袋を取り出す。

千春 ちょっと、奥の部屋借りても。

雅史 もちろん、もちろん。

明利 オムツは？

千春 多分、お腹すいただけ。

千春、退場。

雅史 チャイルドシート用意だけしちゃうよ？

明利 ああ、ありがとう

雅史も退場しようとするが。

タカシ (雅史に) あの、ちょっと。

タカシ、先ほど受け取った封筒を取り出し、雅史に。

タカシ 実は、来月から、しばらく家を離れることになって。

雅史 ……え？ えっと、それは、理由を聞いてもいいやつ？

タカシ ああ、あその他の農家の手伝いっていうか、勉強に行くことにしたんです。住み込みで。

間

タカシ なので、これから、僕、この家の面倒見れなくて。すみません、言おう、言おうと思っただけです。

雅史 お、そっかあ。来月から？

タカシ すいません、急に。

雅史 あ、いやいや。

明利 ありがとうございます。今まで。

タカシ いや、僕、何も。

明利 おめでどう、とも違うか。応援するよ。

タカシ ありがとうございます。

雅史 お父さん反対したんじゃない？

タカシ めっちゃされて、もうボロボロに殴られました。流石にイラッときたんで殴り返したら、意外といけちゃって、気がついたら鼻血出して倒れてました、親父。

間

明利 そうか。

タカシ あ、でも素手なんで、骨とか全然。

明利 まあ、家のことは、これからは、俺たちが、（雅史をチラと見て）いや、むしろ俺が？

雅史 いや、俺もやるよ。

明利 バアッて来てバアッて掃除して、バアッて帰るから。だから、大丈夫。
タカシ そう言っていたらと。なので。

タカシ、謝礼袋を返そうとし。

雅史 新天地で何かと入用になるでしょ。

明利 俺もいくらか。

タカシ あの、本当に本当に！ あの、よかったら、たまに（赤ん坊を見て）写真、送ってください。

明利、雅史を見る。

明利 送るよ。送りつけるよ。
タカシ お願いします。(謝礼の袋を持ち軽く掲げ) じゃ、ありがたく。

と言って、タカシ、謝礼袋を服の内側にしまう。
千春が戻ってくる。

千春 ごめんなさい、落ち着きました。
雅史 よし。じゃあ、行こうか。

〈八場〉

その場は、舞台セットの転換なしに、動物園になる。
そこがなぜ動物園だと観客にわかるかと言うと、動物園らしい音響のギャと、徹役の俳優が、象が檻に入ったミニチュア(ジオラマ)を持っているからである。

千春 人気者ですね、お父さん。
明利 久しぶりなんだって、象が来るの。

間

明利 なんだろう、親父、小さく見えるな。
雅史 本当は大きいのかな。
千春 (赤ん坊に) もうちょっと近く行ってみよっか。

三人、象舎の近くに寄っていく。

雅史 あん時は、麻酔銃だとは思わなかったからなあ。ビビった。
明利 でも、起きてからは、一言も喋らんくなった。
雅史 感謝だよ。おかげでいろいろ滞りなく済んだ。
千春 (赤ん坊に) ほら、じーじだよ。じーじ。お父さんのお父さん。
明利 (父象に) 親父、孫だぞ。かわいいだろう。

明利、スマホを取り出し、自分のドラマのクレジットが映っている写真を見せる。

明利

これ、俺の書いたドラマ。放送されたんだ。深夜の、単発だけど、プロットから任せてもらえたんだ。クレジットにあるだろう。俺の名前。(独り言として) わかんねえか。

その時、象が大きくひと鳴きする。

音楽。

明利を見つめる象、もしくは象役の俳優の目。

【幕】